



Title	ジャック・デリダの初期思想におけるL' imagination の問題
Author(s)	小川, 歩人
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87799
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (小 川 歩 人)

論文題名

ジャック・デリダの初期思想におけるL'imaginationの問題

論文内容の要旨

本論は、哲学者ジャック・デリダ（1930–2004）の哲学的著作に焦点を当て、論の対象としている。より具体的には、デリダが現象学研究から出発して、さまざまな思想的文脈を捥りあわせていく起点として「想像力imagination」の主題へ注目し、その1950年代から1970年代初頭にかけての初期思想の生成と展開のプロセスを明らかにすることを目的とする。

デリダの思想は、1960年代には「現前の形而上学」批判を中心とする西洋哲学歴史に対する批判的読解、1980年代以降は来るべき民主主義、正義等、政治性に強く関わる著作によって知られる。しかし、現前を逃れ、不可能性を強調するデリダの思索はしばしば後続の思想家たちによって批判の対象とされてきた。本論で注目するのは、デリダが脱構築をおこなう際に、あるいはおこなったあとで、何が機能し、作動しているのかということであり、「現前の形而上学批判」と「来たるべきものの思考」のあいだで、デリダの思索がいかなる場を展開するのかを問う。本論は、ここからデリダの思索において「今ここ」と「来たるべきもの」のあいだの領野とは何かという問いを立て、さしあたり、この領野をデリダの思索における「想像力」というプロブレマティックの展開のなかに見出そうとするものである。

本論は2部構成に分けられる。第1部「想像力の問題の発生」では1950年代のデリダの現象学研究を検討し、従来フッサール研究として整理されてきた初期デリダの議論をフランスにおける現象学受容をめぐる「哲学的・政治的地図」のなかに位置付け、想像力論の萌芽、その発展のプロセスを論じた。

第1章「起源的なものと始原的なものの弁証法的パノラマ」では、1950年代のデリダの最初期のテキスト『フッサール哲学における発生の問題』の背景となる「政治的・哲学的地図」を1950年代周辺のフランス現象学受容を背景として、超越論的現象学、実存主義、マルクス主義、科学認識論、ヘーゲル哲学との関係から精査した。

第2章「感性と論理のあいだの発生の問題」では、『発生の問題』において主要な論敵となるチャン＝デュク・タオとジャン・カヴァイエスによる発生論的現象学批判をあつかった。前者は歴史的感性的発生、後者は論理的悟性的発生をあつかうことで、感性と悟性を媒介する超越論的な発生の弁証法というヘーゲル／フッサールの視座を捉え損ねており、彼らに対する応答としてデリダの「起源的なものと始原的なものとの本源的弁証法」というテーゼとを対照させ、これが想像力論を準備するものであることを論じた。

第3章「『幾何学の起源』「序説」における感性的理念性」では、初期デリダの「文学的对象の理念性」という着想に注目し、「幾何学の起源」における幾何学的対象を範例とする理念化のプロセスにおける「縛られた理念性」の位置に見出した。そして、これをサルトル、ブランショらの先行する想像力論・文学論を介して、感性的実在と目的論的理念のあいだで想像力によって形成される「感性的理念性」という初期デリダの理論的枠組みとして整理した。

第2部「新たな超越論的感性論」では想像力の主題の登場以後、「新たな超越論的感性論」として打ち出されるデリダの想像力論の展開を、同時代の構造主義思想における「発生」と「構造」という視座から捉え、文学（第4章、第5章）、言語学（第6章）、精神分析（第7章）、ドイツ観念論（第8章）、現象学（第9章）との関係から論じた。

第4章「構造主義的図式の起源としての想像力——「力と意味作用」Ⅰ読解」、第5章「美的理念と目的論の裂け目——「力と意味作用」Ⅱ読解」では、デリダによるジャン・ルーセの『形と意味作用』読解を検討した。第4章では、まず構造主義批評を現象学との関係から位置付け、デリダが「構造主義的図式の起源」と呼ぶカントの想像力論（『純粹理性批判』における図式論および『判断力批判』における美的理念）への言及を実存主義的現象学からの解釈へ接続させ、志向性概念の深化の根底でハイデガーから引き継ぐ「超越論的構想力」の問題が胚胎されているという解釈を示し、「起源の偽装としての、作品を規定することへの移行」としての想像力による産出作用を捉えていることを論じた。第5章ではデリダの構造主義的目的論批判を、ヘーゲルの『信と知』における構想力論解釈を介して、目的論との緊張関係における美的理念としてデリダが文学的理念性を評価していることを論じた。

第6章「エクリチュールのイメージ——「グラマトロジーについて」再読」では、1965-66年に発表された「グラマ

トロロジーについて」における構造主義言語学解釈を検討した。1960年代初頭のロラン・バルトらの記号論の試みは、構造主義における範例的な言語活動から逸脱するイメージ論の展開を準備しているが、本章ではそのような展開のなかにイメージとシンボルが混淆するデリダのエクリチュール論を位置付け、ロマン・ヤコブソンによるパース記号学解釈との比較を通して検討した。

第7章「1960年代のデリダのフロイト解釈における「舞台化」の主題とその射程」では、1966年5月に発表された論文「フロイトとエクリチュールの舞台」における「舞台化」概念を検討した。当時のフランスの精神分析の流れは対象関係論を中心としてプレエディプス期の想像力を重視する発生論と、ラカン派精神分析を中心としエディプス期の構造論を提出する構造論という二つの傾向において整理される。それらが交差する地点として「形象化可能性」という主題をとりあげ、デリダのフロイト読解を「発生論的かつ構造論的」な「エクリチュール」の領野の分析と解釈し、これを超越論的構想力の根源的描出の読み替えとして解釈した。

第8章「ヘーゲル記号学再読——想像力から空想へ」では、「堅坑とピラミッド——ヘーゲル記号学への序論」(1968)の空想論を論じた。1960年代後半のデリダのヘーゲル読解はハイデガーのカント読解に対するオルタナティブの提示という観点から、それまでの構想力解釈をヘーゲル哲学の体系全体に拡張しつつ再展開するものであった。そして、「直観」と「思考」をつなぐ「表象」の領域における「構想力」への注目は、「記号を産出する空想」という内化と外化の運動の界面においてヘーゲルの体系的弁証法を捉え、そこで目的論的理想を実現しようとする哲学に対する他なるものとしての「機械」という論点を析出させる。こうして構想力/空想の次元を最大限に展開した1972年のデリダの戦略が「終わりなき計算としての戯れ」と位置付けられる。

第9章「「いまだ」と「すでに」のあいだに——「新たな超越論的感性論」としての痕跡」では、ここまでで展開した「想像力」をめぐるデリダの立論を1967年の『グラマロロジーについて』を中心に現象学読解のなかで再検討し、「新たな超越論的感性論」という企図として提示した。カントの超越論的感性論に対する批判としてフッサールにおける超越論的感性論の試みを整理し、これを「生き生きした現在」の位相として1960年代のデリダは評価している。その上で、1960年代後半では、「生き生きした現在」という概念が退けられるかたちでハイデガー的な「脱自的時間」の概念が導入される。その上で、ハイデガーの本来的時間性における未来優位の時間論から距離をとるかたちで、レヴィナスに依拠する痕跡の時空間という絶対的過去の次元が練り上げられる。その上で、レヴィナスとハイデガーの痕跡概念を比較しつつ、痕跡の次元を倫理学によって基礎付けるレヴィナスではなく、あくまで時空間論としての感性論を展開するハイデガーの寄与分を指摘することで「新たな超越論的感性論」というデリダの構想を示した。

本稿は「感性的理念性」(第3章)、「美的理念」(第4章、第5章)、「イメージのシンボル化」(第6章)、「形象化＝描出＝舞台化」(第7章)、「幻想的なもの」(第8章)、「新たな超越論的感性論」(第9章)といったデリダにおける「想像力」の主題展開を検証し、その思想史的な位置づけを論じた。以上の論述を通して、本論が検討を試みたデリダの思想における「想像力」の問題は、初期の現象学研究のうちで萌芽的にあらわれ、とりわけ1960年代以降、文学、言語学、精神分析、人類学といった多様な理論的参照軸のあいだのアポリアを形象化し、分節していく領野として示された。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (小 川 歩 人)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	檜垣 立哉
	副 査	教 授	村上 靖彦
	副 査	准教授	野尻 英一
	副 査	学外委員	宮崎 裕助

論文審査の結果の要旨

本論文は、フランスの20世紀の哲学者ジャック・デリダの思考について、その初期思想の形成に照準をあわせ、L' imagination =構想力／想像力という主題を軸として解明を試みたものである。従来、デリダの思想は「西洋の現前の形而上学」の解体の試みとして、その「脱構築」的側面が強調され、否定神学的に解釈されたり、あるいは後期の正義論を軸として政治学的なものとして読まれたりしてきたという経緯がある。それらは確かにデリダの思想の重要な側面を捉えるものではあるが、本論文は、そうしたなかで提示される理論と実践の区分や、各時期におけるデリダの思想のさまざまな「転回」という事態を貫いて、カント由来の（さらにハイデガーの批判を経た）構想力／想像力という主題が、とりわけ現象学や構造主義のフランスの文脈における独自の受容・展開の過程において、文学的な議論とも関連させながら、デリダの議論の主軸をなすものとして読み解くものである。扱われている20世紀冒頭のフランス思想の布置の記述は、現象学、マルクス主義、実存主義、エピステモロジー（科学認識論）、ヘーゲル、記号論、構造主義、文芸理論など多岐にわたり、そのなかでデリダ初期の60年代後半の著作群が描かれていく事情がきわめて精緻に解明されている。

本論考は第一部と第二部及び3つの補論に分かれ、それぞれ以下のように記述が進められていく。

まず第一部は「想像力／構想力論の萌芽」と題され、1950年代から1960年代にかけてのデリダの基礎的構想としての想像力論の成立について、デリダの現象学研究に定位しながら記述がなされる。第1章、第2章では、1950年代のデリダがおかれた時代状況が整理され、1953年から1954年にかけて執筆された『発生の問題』が検討される。『発生の問題』は、きわめて若い時期のデリダによる、フッサール現象学に即した起源と始原をめぐる錯綜の解明を主題としており、その後のデリダの研究すべての元になる要素が含まれるものであるが、第1章では、現象学の内部での諸事情とその実存主義的な解釈やマルクス主義との関係という当時のフランス的状况が素描され、第2章ではチャン＝デュク・タオ、ジャン・カヴァイエス、ジャン・イポリットらの議論との関連のなかでデリダの思想形成が具体的に示されてきた行程が仔細にたどられ、感性的なものとの総合という、構想力／想像力論の枠組みがすでに形成されていたことが示される。ひきつづく第3章では幾何学の起源の「序説」という、デリダがフッサールの文章の翻訳をその序論を執筆した作品における「感性的理念性」という問題に迫っている。そのなかで、幾何学における「理念的同一性」という主題が、当時のデリダ自身の文学における言語の「理念的同一性」という文学論的議論（ブランショなど）と関連する事態が展開され、デリダ独自の思考のスタイルが確立するあり方がみてとれる。

第4章及び第5章においては、デリダ初期の代表作である『エクリチュールと差異』に所収されている「力と意味作用」における、ジャン・ルーセ論を主題とし、構造主義批判を通じて、デリダがカント的な構想力論を自己の想像力論に美学的に変容させていくあり方が示される。

第二部は「新たな超越論的感性論」と題され、上記のようなコンテキストのなかで形成されていったデリダの構想力／想像力論が、デリダ独自のものとしてさまざまな方向へ拡張されていく事態が記述される。そこではとりわけ構造主義と精神分析との対立と、その議論の取り入れにおいて、デリダが独自の道を模索するあり方が記述される。

第6章は「エクリチュールのイメージ——構造主義言語学解釈」と題され、ソシュールの言語学や、ヤコブソンを通じたチャールズ・サンダース・パースの記号論が、『グラマトロジーについて』において批判的に受容されるあ

り方がたどられる。ついで、第7章「1960年代のデリダのフロイト解釈における「舞台化」の主題とその射程とでは、『エクリチュールと差異』に所収された「フロイトとエクリチュールの舞台」をめぐって、デリダと精神分析の関連を当時のパリの精神分析家であったジャック・ラカンとの関係を射程におさめつつ「舞台化＝形象化」という主題において押さえていく。同時にポール・リクールにおけるフロイト解釈なども検討される。この章では「無意識」の表象の問題と、舞台化＝形象化という問題の二重性という大きな問題性が、当時の精神分析をめぐるさまざまな議論から浮かび上がらせる仕組みになっている。これには補論1「「無意識の誕生」の神話について——現象学と精神分析との交差」が付されている。

第8章は「デリダによるヘーゲル記号学検討の背景とその射程について」と題され、『哲学の余白』所収の「堅坑とピラミッド」におけるヘーゲルの議論の検討を軸に、初期の現象学研究から中期において大きな位置付けをもつことになるヘーゲル哲学のデリダによる受容が検討され、カント的な構想力とは異なったヘーゲル的な構想力の引き受けが描かれ、その後のデリダにおける議論への展望が示されている。第9章は「「いまだ」と「すでに」のあいだに——「新たな超越論的感性論」としての痕跡」と題され、『グラマトロジーについて』においてみいだされた「新たな超越論的感性 Une nouvelle esthétique transcendantale」の広がり、エマニュエル・レヴィナスの「住居」論との連関などに拡張して描かれる。さらに二つの補論「ルソーにおける想像力の溢れ出し——『グラマトロジーについて』第2部における想像力の主題について」「亡霊的空間のL' imagination」が付され、とりわけ後者においては技術論やメディア論につながっていくデリダの構想力／想像力論の射程の広さが示されている。

本論は、上述したように、きわめて錯綜したコンテキストをもつ現代フランス思想の布置のなかから、デリダが独自の議論を形成したあり方を、数多くのテキストや関連文献に及んで位置付けており、また想像力／構想力として一貫して読み解くというラインは揺るぎがない。記述量も膨大であり、大変な労作として高く評価できるものである。

以上、論文審査の結果、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。